

校内別室登校の運用について—児童のニーズを基にした支援とコミュニティづくり—

不登校児童の状況

対象児童は、小学校2年生時、学習についていけずに休みがちになり、3学期から長期欠席になった。3年生1学期から別室登校を開始した。別室仲間と関わり合いながら楽しく過ごし、自分で選んでクラスの授業にも参加している。欠席することがあるため、学習面の支援は十分ではない。

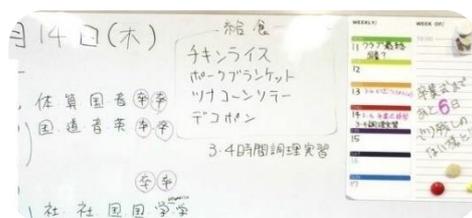
具体的な取組

○学級復帰をゴールにしない

別室登校について、当該児童・保護者には、「自分に合った学び方を探していくための場所」、「ゴールは学級復帰ではなく、自分で居場所を選択できるようになること」、「『学校に行かない』ことも選択肢の一つであるが、どこかで学習することが必要。」と説明している。

○主体性の尊重

毎日、参加する授業を自分で決める。友達から刺激を受けて、参加意欲を高めている。



○環境整備

学習スペースとリラックススペースを設けて、パーティションで仕切っている。

教室の半分の広さである。

職員室の隣にあり、担任、空き時間の教員等が気軽に訪れることができる。



○校内の施設と人材の活用

運動できる部屋で、利用児童全員で活動する。

空き時間の教員による調理・図工・家庭科等の個別の教科補充を行う。

学級のプリントやテストを個々に管理する。



成果

- ・多くの別室利用児童は学級の授業に参加できるようになっている。給食以外は学級で過ごす児童もいる。
- ・異学年集団での関わり合いを通して、安心感を得やすく、コミュニケーション面の成長が見られる。
- ・登校前に利用開始した児童は不登校になっていない。

課題

- ・部屋が狭い。
- ・人材が乏しいため、支援が十分に行き届かないことがある。

校内別室支援員と校内連携による不登校支援の取組

不登校児童の状況

別室の利用対象としている児童のうち、「別室利用しつつ、教室で学習できている児童」については、一日1時間、別室で自習し、他は教室での授業に参加することとしている。また、「登校はできるが、教室には行けない児童」については、一日2時間、別室で自習し、帰宅することとしている。その他、「休みがちで、登校できない児童」については、別室に登校し、支援員と楽しく会話することとしている。

具体的な取組

○2人体制で別室を毎日開室

児童へ寄り添い、落ち着いたら教室へ促すなど集団参加が不安な児童への対応をする。

別室に来室した児童を見守る。

話を聞く、受容するなど、心の交流を図る。

時には助言や丸付けも行い、習の支援を行う。



○安心して、楽しすぎない雰囲気づくり

様々な椅子や机があり、好きな場所で学べるようにする。

具合が悪い時に、横になれるソファベッドを設置している。



休憩時間に児童と共に飾り付けをしている。

○別室での過ごし方

教室に登校、別室に行く時間を担任と確認し、課題を受け取る。

来室すると、別室ですること（課題）を支援員と確認し、好きな席で自習をする。（当該児童は一日1時間の利用）

終わりに、「利用カード」に振り返りを書く。支援員も励ましの言葉を書く。

教室に戻る。



○登校しづり児童への支援

別室連絡会で状況報告し、支援体制を見直す。

副担任が門で待ち、遅刻の場合は、支援員が後を引き継ぐようにする。SSWが、週1回、一緒に登校するようにして、養護教諭と会ってから、安心して教室へ行くこともある。



成果

- ・心を休ませて、教室へ行くなど、別室が安心して学習できる居場所になった。
- ・学習支援補助員、支援員、心理士の実習生、講師など人的な別室支援を充実させたことで児童が教室の授業にも参加できるようになった。

課題

- ・利用児童が増えた時の別室利用の仕方を考えるなど、校内別室の活用について、教職員の更なる理解を図る。

校内別室の現状について

不登生徒の状況

対象生徒は、人と接することが苦手で、気持ちの落ち着かない時に来室して、落ち着いた後に教室に戻っていくことが多かったが、最近は朝の開室時間から終わりまで部屋にいることが増えている。

具体的な取組

○校内委員会での情報共有

SCとの定期的な面談やシートを使っている情報共有を行っている。

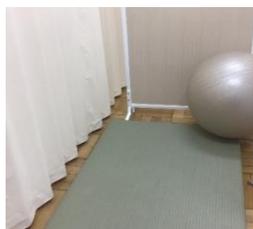
○学習スペースを確保

- ・オンライン授業も受けられる。
- ・カーテンで外部と隔離できる。
が可能



○校内別室の様子

リラックスできる場所や身体を動かせる場所を設置した。四方を囲まれており、場合によっては、横になって休むこともできる。



○授業に参加しやすい雰囲気づくり

生徒が、各自翌日参加する予定の授業を記入する。

事前に共有することで担当教諭にも生徒が参加しようとする意思が伝わり生徒も授業に参加しやすい雰囲気づくりができる。

成果

毎授業ごとの教員の見回りや、支援員のフォロー、SCとの面談やSSWとの関わりを100%実施するなど、校内別室内の活動にしないことで、教室に戻りやすい環境を維持している。

課題

別室を「生徒の居場所」と「教室復帰を目指す場所」の運用にも活用することが必要である。

校内別室における支援について



不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校5年生から別室登校しており、中学校入学後も緊張が強く、教室にも入れず休みがちだったため、登校時間をずらして保健室登校を開始した。校内や保健室内では他の生徒と接することを極度に拒み、保健室のパーティションの中で数時間過ごし、給食を食べて下校していた。年度途中、別室開設と同時に利用を開始したことで登校できるようになり、欠席も減った。現在は、毎日別室に登校しており、自習に励み、参加可能な行事に取り組もうとする姿が見られるようになってきている。

具体的な取組

○校内別室利用

当該生徒に校内外で人と会うことが苦手なため、なるべく人に出会わないルートを決め、教室復帰へのステップとして別室を利用している。体育館での行事や所属学級に出向く際は支援員が付き添い、他の生徒から見えない場所で参加できるよう配慮をしたことで、当該生徒の参加意識が高まり、学年行事に参加することができた。

○他教員との関わり

別室でも気分の浮き沈みがあるため、自習できる時は取り組めるが、気分が乗らない時は勉強と向き合えないため、支援員が声をかけ、保健室や図書室を利用しながら心を落ち着かせたりしている。

担任や副担任、管理職が空きの時間に別室に顔を出し、多くの教職員と接する時間をつくりながら複数の目で支援している。

○校内支援委員会

週1回校内支援委員会を設置し、各学年の不登校生徒・要支援生徒の現状や、関係機関との連携と具体的な支援方法について共通理解する場を設けている。

組織は管理職、不登校対応巡回教員、特別支援コーディネーター、生活指導主任、養護教諭、通級指導教員（専門員）SC、SSWで構成している。

○学習教材の充実

校内別室に各教科の授業で使用したプリントを管理できる棚を設置した。利用する生徒が自分で教科を決めて自習に取り組むようにしたことで学習意欲を高めることにつながった。日記を記入させ頑張りを褒めることで担任との会話も増え、生徒の自己有用感を高められている。

成果

不登校生徒の約半数が校内別室を利用し、不登校支援の入口として定着してきた。個人差はあるが多くの教員が関わり、環境を整備することで登校できるようになった。不登校になる前に声をかけて対応し、生徒が安心できる居場所として別室につなげることができた。

課題

当該生徒は、「教室での学習への参加」、「進路選択の未定」が課題であるため校内体制を整備していく。

支援員とのコミュニケーションを通じた登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 2 学期（9 月）から不登校となる。2 年生の 1 学期（6 月）から別室への登校を続けている。人と接するのが苦手である。

具体的な取組

○別室登校の実施

子供と家庭の支援員を常駐し、別室登校時の見守りを行った。

別室登校時を通して外出への抵抗感を払拭することと、他人と接する機会に慣れるようにしていった。

○SCによる面談の実施

SCによる週 1 回の面談を通して、当該生徒との関係づくりを進めた。

本人との関係を築いた上で、自己理解を進めていった。

○自立活動の実施

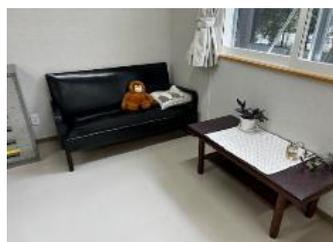
巡回指導教員による週 1 回の自立活動を行った。当該生徒が学習面や生活面を振り返り、考えた内容を取り組めるよう見守り、支援した。

自立活動の内容を校内委員会で共有した。

○不登校対応巡回教員による面談

週 1 回の不登校対応巡回教員による面談を行った。

面談の内容を校内委員会で共有した。



成果

3 学年 5 月頃から他人とのコミュニケーションを抵抗なく行えるようになってきた。

当該生徒は、卒業までに教室での学習活動への復帰を目標としている。

課題

卒業後も不登校だった生徒に対する継続的なサポート体制を維持することが課題である。

校内別室指導支援員による取組について

不登校生徒の状況

当該生徒は、集団生活や発表等の活動を苦手としており、そのような苦手意識から登校を渋る傾向が出始め、2学期から校内別室を利用している。

具体的な取組

○校内別室指導支援員による付き添い

登校しぶりが出始めた時期では、校内別室支援員が学校行事や学年・学級の活動に付き添いながら参加を促し、気になる様子や気持ちを伝えることで不安を取り除きながら学校生活を送ることができるよう支援した。

○校内別室における学習支援

集団の中での活動が苦手であることから、校内別室での学習を進めることは前向きであったため、校内別室の学習環境を活用して個別の学習に取り組むことができるよう支援した。

また、個別の生活の記録を活用して生活を振り返ることと教員間の情報共有を行えるようにした。



○支援員との会話内容の共有

校内別室の利用を開始したことにより生活環境や心境の変化が見られた。そのことを校内別室支援員が会話から汲み取り、気になることや不安に感じることを話し合う等の関わりを行った。内容を記録・共有し、他の活動における配慮事項として全教職員と共有した。

○自己決定の重視

学習活動に対する支援の他に、本人の希望で折り紙や絵画等の活動を取り入れて校内別室支援員が協働で支援した。協働として取り組むことでコミュニケーションを図りながら楽しんで過ごすことができた。

成果

登校しぶりが始まってから、完全に登校ができない状況になる前に学校との関わりを続ける生活習慣を構築し、校内別室支援員の働きかけを中心に徐々に不安を取り除くよう支援を行うことができた。

課題

集団での活動には復帰できていないため、オンライン授業等の支援から教室や集団での生活にも参加できるよう支援していく。

校内別室について（校内別室登校）

不登校児童の状況

対象児童は、環境の変化により、5月から教室に入ることへの不安感が少しずつ高まり、保健室登校や別室登校となる

具体的な取組

○利用方法の検討

- ・当該児童が、校内別室での過ごし方を決める。
- ・当該児童が、担任、保護者と校内別室支援員で取り組む内容について相談する。
- ・進路を確認しながら、週1度担任とコミュニケーションを取る時間を設定する。

○授業への参加検討

- ・登校後、参加できそうな授業を相談する。
- ・算数習熟度別学習や専科授業において、教室以外で参加できる授業を支援員と相談する。

○別室での過ごし方

- ・授業の進度に合わせたドリル学習に取り組む。
- ・支援員や別室登校をしている他の児童とゲームを通じたコミュニケーションを図る。
- ・自分の好きなイラストを描くことやタブレット端末のタイピング等に取り組む。

○振り返り

- ・一日を過ごした内容をワークシートに記入し、できたことを振り返り、今後の見通しをもつ。



成果

校内別室に定期的に登校することができて自信をもつことができています。

授業内容によって、担任が別室に迎えにきたり、友達とコミュニケーションを取ったりすることで教室へ復帰する回数が増えてきた。

課題

利用する児童は、自学自習が基本的な過ごし方であるため、適切な支援が必要である。

校内別室を活用した登校支援について

不登校児童の状況

対象児童は、入学後は学級内で過ごしていたが、途中から集団生活や学習などへの不安感があり不登校になった。しばらく登校できない時期もあったが、校内の別室を利用することで学校へ登校できるようになった。別室を活用しながら教室での活動にも参加できるようになっている。

具体的な取組

○教室内の工夫

個別のスペースと、集団で使えるスペースを確保し、場に応じて使い分けができるように配慮している。

給食は集団で食べることで別室登校児童内の仲間意識が高まっている。



○一日の中で「教室」「別室」を自分で決める

「この授業なら参加できそう」「給食は教室で食べられそう」という当該児童のニーズに応じて、教室と別室の行き来ができるように配慮している。いつでも別室に戻って来られる安心感から、登校する日が増えている。

○情報共有

支援員が曜日ごとに異なるため、支援員同士の情報交換や担任との連携を大切にするために、支援員には毎日記録を記入している。記録は管理職、担任、不登校担当が毎日確認している。児童の些細な様子なども共有することでよりよい支援につながっている。

○SC、SSWとの連携

SSWに週1回学校へ訪問し、不登校支援について助言等している。担当児童と関わることもある。

児童のニーズに応じて、SCと定期的に話す機会を確保している。



成果

令和6年度に別室の整備ができ、別室を活用して授業に参加できる日が増えたり、登校が増えたりする児童がいた。

課題

別室が一部屋しかいないため、別室に登校する人数が多い日は一人一人のニーズに合わせたり、ルールを守りようにしたりすることが難しい場面がある。